



会長メッセージ

中国のどの都市よりも日本語学習人口が多く、近代より日本と浅からぬ関係をもっている都市、それが大連です。中国の改革開放以降、積極的に日本企業を誘致してきました。現在はおよそ2,000社の日系企業や個人が貿易、生産、教育活動などに従事しています。それらの枢要なところで稲門会のメンバーが活躍していることを、頼もしく感じます。

当地の稲門会が組織として活動を開始したのは、大連の企業誘致が本格化した2000年の少し前からでしょう。その後、徐々に会員も増え

てきました。現在では、約3カ月ごとに活動しており、大連マラソン大会・駅伝、ゴルフ早慶戦、早慶合同懇親会など、それぞれの役員が分担しています。他校の校友会にはない結束と活動力、会員同士の情報網をもっている稲門会です。また、日本と距離が近いこともあり、かつての会員が時々立ち寄ってくれて旧交を温めています。さらに、東京では大連稲門会東京支部も自然発生的に立ち上がり、時折会合をもっています。

高橋正英(1970年政経)

会員からのメッセージ

2010年に博士留学のために大連に来ました。気づけばこちらの大学で日本語教員の仕事を始め、ほかに翻訳など書き物をしながら、しかも留学も終われずにいます。

それまでは福岡などで新聞記者をしており、日々の仕事に追われて稲門会の集まりに出たこともありませんでしたが、大連は校友の絆が非常に強く、集まる機会も多いので、忘れかけていた『都の西北』の歌詞も完全に思い出しました(笑)。

浦上早苗(1998年政経)

大連は私にとって3番目の外国赴任地です。最初のバンコクは大都市で、現地法人内に校友が社長以下8名もいたため、稲門会に属することもなく4年間過ごしました。次はメルボルンで、オーストラリア第2の都市とはいえコンパクトだったので、4年間メルボルン稲門会にお世話になりました。ここ大連は日系企業も多く、大連稲門会は大き過ぎず小さ過ぎず、中国人会員も含め老若男女が集うとても楽しい会であり、ほぼ皆勤で参加しています。

小池 享(1983年商学)

日本に留学し法学研究科を卒業後、故郷の大連に戻って法律系と金融系の仕事を始めました。そのとき大連に稲門会があることを雑誌を見て、早速入会しました。母校の校友会

のおかげで数多くの先輩と後輩に出会って、毎回楽しい思い出を残すことができました。大連稲門会は私にとって、以前の留學生生活を思い出す場であり、校友の交流舞台としても大切にしています。大連稲門会は早稲田大学卒業生として一生の誇りです。

肖 鑫(2008年法研)

1996年に中国にきて以来、17年半にわたって北京に住んでいましたが、2013年に仕事の関係で大連に引っ越して来ました。同じ中国とはいえ、ほとんど知り合いがない土地で、最初は心細かったのですが、大連稲門会の先輩、後輩の皆さんに温かく迎えていただき、とても心強く感じました。世界のどこに移り住んでも、校友の皆さんに温かく受け入れていただけたということは、本当にありがたいことであると強く思いました。

柳田 洋(1989年商学)



2015年新年会

大連稲門会について

いるため、大連に来たときには現地で交流会も開催しています。

幹事長 山崎誠司(1991年理工)

2014年大連マラソン大会駅伝ゴール後



大連稲門会は2003年に設立され、現在は40人程度の会員数となっています。大連と日本とは歴史的に関わりが深いこともあり、日本企業の現地法人が多く存在します。そのため会員の多くは駐在員ですが、日本語を話す中国人が多いので留學生の会員も多く、さらに退職後に中国語を勉強しにくる年配の方もいるのが当会の特徴です。

主な活動は懇親会が中心ですが、設立直後から宿敵三田会とのゴルフ早慶戦が実施されており、現在では春と秋に開催するのが恒例行事になっています。さらに09年には有志が大連マラソン大会の駅伝の部に初エントリーしたことをきっかけに、「暫定競走部」なるスピアウト部門が発足しました。ほぼ毎年駅伝に参加するのはもちろんのこと、上海マラソン大会にもエントリーするほどの本格的な集団になりました。

また、13年から早稲田大学よさこいチーム「東京花火」が日中の学生交流イベントに参加して

大連の魅力

影が残るものが今も点在し、歴史ファンを魅了しています。

原島大介(2002年教育)

- 1.日本統治時代から今も走り続ける路面電車
- 2.上野駅をモチーフとした大連駅



「東洋のバリ」、「北方明珠(北の宝石)」……。遼東半島の南端に位置する大連市は美しい街並みから、こう称されます。景観に加え、夏でも30度を下回る冷涼さ、ウニなど豊富な海産物、人々の穏やかさは、中国のほかの都市にはない最大の魅力です。

中国は、日本人にとって何かと住みづらい国だと思います。ただ大連には1990年代から日系企業が進出、現在は約2,000社が存在しており、約6,000人の日本人が暮らしています。大連の人口約600万人のうち、1パーセントは日本と何らかの関わりがあるといわれ、日本語を話せる中国人も多く、日本への理解も比較的進んでいます。このため、日本人が最も住みやすい中国の都市といえます。

一方、地政学上の重要拠点として、近現代史に翻弄された街でもあります。司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』の題材となった日露戦争の激戦地、旅順口区には203高地や旅順港などの史跡が残ります。また旧満州国として都市整備が進められた結果、大連駅や路面電車など当時の面